**説教20231008フィリピ2：1-13マタイ21：28-32「考え直してみれば」**

**今日の説教題は「考え直してみれば」ですが、この考え直す、は、今日のマタイ福音書でイエス様が語られた　たとえ話の中に出て来る言葉です。すなわち、兄は初め「イヤです」と言いながらも、後で考え直して、父のぶどう園へと出かけたのでした。**

**この考え直すという言葉は、聖書にそんなに多く出てくるわけではないですが、ここでイエス様がこの言葉に込められた意味と言うのは、「悔い改める」ということであります。この悔い改めるという言葉のほうは聖書にいたるところに出て来ますし、毎週の礼拝でも私たちがイエス様から勧められていることであります。**

**悔い改める、と言うのはどういうことかと言いますと、今迄、自分中心に、利己心や虚栄心から行っていたことに気付いて、この罪について反省し、イエス様のほうに向き直って、イエス様によってその罪を打ち砕かれて、自分の内にイエス様をお迎えするということです。**

**この悔い改めるということが救いの始まりであり信仰の始まりですが、現代社会においては、この悔い改めるということがなかなか難しくて、なかなか悔い改めが起こらないという悲しい現実があります。**

**それで、この二人の兄弟の言動をよく見ていきますと、何故、現代社会で、悔い改めが起こりにくいのかの原因の一端が見えてきますので、見て行きましょう。**

**父親は兄弟に、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言いました。兄は『いやです』と答えましが、後で考え直して出かけました。弟は『お父さん、承知しました』と答えましたが、出かけませんでした。この親子の応答は、日常生活での出来事を想定しているでしょう。つまり今に置き換えれば、父親は子供たちに「今日は学校へ行きなさい」と言って、兄は「嫌だ」と言った後で、考え直して出かけ、弟は『お父さん、承知しました』と言いながら出かけなかった、或いは出かけられなかったというような出来事に置き換えられます。**

**私たちの人生は、こんな日々の小さな出来事の積み重ねで形作られていきますが、今の時代は、弟のような態度を取る場合が、圧倒的に多いのではないでしょうか。この弟の様に、言葉のあたりは柔らかで従順でありながら、結果的にその言葉は小さな嘘となってしまって、後で言い訳やお詫びの言葉を口にすることになります。或いは、言い訳やお詫びもなくなって、小さな嘘が日に日にどうしようもなく積み重なっていくという事態にもなりかねないのです。**

**一方、兄のような態度を取る人は今の時代、少ないです。それはなぜかというと、大体、目上の人に「嫌だ」というような拒否の言葉を返すこと自体が、何となく禁止されていると言った風潮があるでしょう。そして、今の時代、考え直すということが中々、起こりにくくなっていると思います。私の人生を振り返ってみましても、自分自身が考え直したということや相手が考え直したということは、そんなに数多くは起こらなかったし、そしてそんな数少ない考え直しの経験は、今でも感動的に記憶に残っています。**

**たとえば、忙しいのでコンサートに来れないと言っていた友人が、「やっぱり来たよ」と言って来てくれたときは大変うれしかった記憶があります。**

**このイエス様のたとえ話でも、『いやです』と言っていた兄の姿を、父親がぶどう園で見出した時、この父親は大変うれしかったに違いありません。**

**先ほどは小さな嘘が積み重なっていく場合を申し上げましたが、反対にこの様に、小さいけれども確実な嬉しさが積み重なっていくならば、それに味を占めた人たちが益々考え直して、小さな嬉しさが積み重なっていくということが積極的に行われていく事でしょう。**

**この兄弟のたとえ話は、父親の視点から見ればわかり易いです。父親はその時嬉しかったか、それとも悲しかったかということです。父親は、兄が姿を見せたのを喜び、弟が姿を見せなかったのを悲しんだのでした。父親は弟のことを心配した事でありましょう。**

**このたとえ話で、この父親は、愛なる父なる神さまを喩えています。愛なる父なる神様は、私たち人間一人ひとりをこの上なく愛しておられますので、この様に弟のことを心配したのです。ところが、親の心 子知らずということも間々あります。この弟は、勝手気ままに過ごしていたのかも知れませんし、自分のことに集中して、父親のこと等構わなかったのかも知れません。**

**この成り行きにおいて、父なる神と兄との間柄は益々親密になりました。しかし父なる神と弟との間柄は離れていくばかりです。兄が父なる神を信じる信仰は増し加えられますが、弟が父なる神を信じる信仰は失われて行ってしまうのです。**

**私たちの信仰は、この様に、父なる神が感じる嬉しさ、喜びによって深まって参ります。この兄が、考え直したのには、さしたる理由があったわけではないでしょう。彼は、イヤだと言っていたが、時間が空いたので出かけたというのではなくて、何故かその嫌な思いが払拭されて出かけたのでしょう。ここには信仰の神秘が働いて、兄は、喜ぶ父の顔を見たくなったのかも知れません。**

**この様に、信仰ということは本来、喜びに満ちたことであります。パウロはこのことを次の様に美しく語っています。フィリピの信徒への手紙2章 1節から**

**そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。**

**このパウロの勧めの言葉の中心には、主イエスキリストがいます。私たちは、キリストによって励まされ、愛され、慈しまれ、憐れまれるのです。そして、自分だけではなくて相手も喜ばすことが出来るようにされるのです。利己心や虚栄心から解き放たれて、自分はへりくだって、謙遜になって、相手を尊敬することが出来るようにされるのです。そして、自分中心の思いを捨て、相手に心を配ることが出来るようにされるのです。**

**ここには、キリストのほうに向き直るという悔い改めが起こっています。古い自分を考え直して、新しい命へ向かう姿勢があります。**

**私たちが悔い改めるということは日常生活で毎日起こることでしょう。それは小さな出来事かも知れません。取るに足りないようなことかも知れません。しかし、その一つ一つの悔い改めの基礎には、イエスキリストがいつも変わらず居られるのです。**

**ではイエスキリストという御方はどんなお方なのでしょうか。パウロは語ります。**

**キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、**

**かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。**

**このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。**

**聖書には、私たち人間に対する２つの異なる見方があります。どちらも創世記に記されていますが、一つ目は、人間は神の似姿として造られたという見方、そして二つ目は、人間は土と塵からつくられ又、土と塵に戻されるという見方です。**

**キリストは、神さまと等しいものでありますが、或る時、考え直されて、土と塵でしかなかったこの地上へと、人間の一人としてやって来られました。キリストは誠に神であり且つ人でもあります。人は悔い改めないと、土と塵とに戻される存在ですが、キリストを信じて、キリストと共に生きるように変えられる時、神の似姿として完成される道を歩む者へとされるのです。**

**ではキリストは何で、土と塵の地上に来て、わざわざこの地上での苦しみを身をもって味わわれたのか、そして、誰も味わったことがない十字架の苦しみをも、その身をもって味わわれたのでしょうか。それはその苦しみの次に来る、天に昇る喜びを御自身でも味わわれる為だったでしょう。そして、キリストを信じる者たちが、同じようにその天の国の喜びを味わえることが、キリストご自身の何よりの喜びであったのです。**

**私たちの信仰は、決して頑固なものではありません。私たちが頑固であることを聖書は再三戒めています。では一途な変わらない信仰と言うのはどういうことなのでしょうか。**

**それは、日々考え直して、キリストのほうへ日々悔い改めていくということです。私たちが日々置かれている立場や状況は、否応なしに変わっていくものです。又、時代も変わっていきます。昨今のニュースの報道を聴いておりますと、昨日まで許されていたことが、今日は激しく責め立てられていると言ったことが世の中では起こっています。私たちは、この移ろいやすい世の中を土台として生きておりますと、その移り変わりに翻弄されるばかりなのではないでしょうか。**

**私たちは、そうではなくて、イエスキリストのほうを向いて、キリストを自分のうちにお迎えして、キリストの御心を行っていくならば、救われます。**

**キリストは、本来、土と塵とに戻される存在である私たち人間を、神の似姿へと変えて下さるただ一人のお方であります。キリストが体験された十字架の苦しみとその後の喜びは、真実な事であります。私たちの罪の為に、血を流し苦しまれたキリストを信じて、最後までキリストに従順に従って行く私たちは、日々の悔い改めによって救われます。**

**キリストは、私たちの苦しみも喜びも、死も復活も、全てを御存じであり、又、恵みとしてそれをその都度、恵んで下さるお方です。キリストに自分の全てを知られているということは、或る意味、恐ろしいことでもあります。しかしその恐るべき主イエスキリストに全てを委ねて、従順に歩む時、私たちは、計り知れない、主イエスの憐れみと慈しみに満たされることになるでしょう。**

**私たちは、十字架に恐れをなして逃げることなく、この真実の喜びを味わいつつ、主イエスの道を共に歩んで行きたいと願います。**

**祈り**

**父なる神よ、あなたは兄も弟も、全ての人を愛し、いつも心配していて下さいます。その御心お覚え、感謝致します。どうか私たちが悔い改めて、あなたのほうへと向きなおって、あなたを喜ばす行いが出来ますよう、導いて下さい。**

**全てを御存じである神よ、私たちを悩み苦しみから解放し、神の似姿へと変えられていく喜びを得させてください。試練や苦難をも恵みとして頂き、あなたの道から反れることがないように守って下さい。**

**この世にあって、争いごとが頻発しています。身近で起っている対立やいじめの数々、イスラエルとパレスチナの間で始まった戦争を省みて下さい。どうか私たちが憎しみや嫉妬の情によって動かされることなく、あなたのぶどう園と言う、まことの仕事場で、喜んで働く者とならしめてください。**

**病に苦しむ方々を覚えます。あなたは、私たちに聖霊を注ぎ、朽ちるこの体を、神の似姿として朽ちない体へとつくり変えて下さいます。その大いなる恵みを覚え、あなたに感謝と賛美を捧げます。御子イエスが私たちの内に住んで下さって、益々その業を豊かに成し遂げて下さいますように。**